

「農村精米所」こそが 世界の小さな稲作農業の「希望の星」

評者 荒木徹也（東京大学准教授）

日本人の多くは万国共通だと思
っているかもしれないが、じつは
日本の米づくりは、世界で唯一の
ガラバゴス化した事例なのだとい
うことを詳しく学べる本である。

日本では収穫後のイネを脱穀・
乾燥後、農民自身がさらにモミす
りしてモミ（粃）から玄米にまで
仕上げて販売するのに対し、日本
を除く諸外国の稲作農民はモミの
まま業者に売り払い、商業精米所
がモミすりと精米を同時に行なっ
た後、白米として流通する。玄米
流通とモミ流通の違いである。

これを些細な違いであると思わ
れるかもしれない。しかし、玄米
であれば一目で品質がわかるが、
モミの品質は肉眼ではわからない
ため、諸外国の零細稲作農民は出
荷したモミを安く買い叩かれてし
まうのである。大規模稲作であ

ばモミの品質検査に基づき品質相
応の価格が得られるが、小規模稲
作の場合には品質を無視される。
ではどうしたらよいのか？

著者の古賀氏は、アジア・アフ
リカ地域での長年にわたる国際協
力経験に基づき、諸外国の零細農
民が自発的に稲作に携わるよう
なるためには、安い加工賃で機械
により精米する小規模な「農村精
米所」の自由な設置を認めさえす
ればよいと提起する。玄米流通の
日本では必要とされない農村精米
所が、諸外国の零細農民にとって
は正当な価格で売れる白米をわず
かな経費で入手できる唯一の現実
的な手段であり、救世主となるの
である。

日本であれ諸外国であれ、米づ
くりの当事者は農民である。とり
わけ、アジア・アフリカ地域の零



『むらの小さな精米所が救う アジア・アフリカの米づくり』

古賀康正 著

農文協 2200 円（税込）

細農民は開発援助の対象とみなさ
れることが多いが、われわれ日本
人を含めた外部者の役割は、当事
者である「農民の力を信じる」こ
とに尽きる。零細農民であっても
稲作に儲かる可能性があれば、モ
ミや米の品質向上のために自発的
かつ意欲的に工夫するのである。
アジア・アフリカ地域をはじめ
とする各国で農村精米所の自由な
設置が認められ、世界の小さな稲
作農業の「希望の星」となること
を願ってやまない。